



晩秋に宝石箱を見つけました

(写真 松本博充)

- サークル紹介
- 小川に生きる
- 小川村の神社② - 味大豆十二神社 -
- 歴史探索
- ここに生まれた
- 小川短歌会作品
- 図書室だより
- 路端の小さな命②



サークル紹介

(参加してみました!)

小川作陶クラブ (後編)

後編は素焼きからです。ゆつくり乾燥させた物を順に窯に入れていき、夜の作業だったため火入れは翌日でした。焼いて冷ます時間が必要なので一週間入れたままにしておくそうです。

翌週釜から出した物は一回りほど小さくなり軽くなつて、粘土から焼き物に変わっていました。

次の作業は釉薬を付ける(掛ける)作業になりますが、まず裏面(高台や接地面)に釉薬を弾く釉抜き剤(撥水剤)を塗ります。ご家庭の陶器の裏を見ていただければ土の色がほぼそのままなので分りやすいですね。ちなみに磁器と言われる物は薄い白い物が多く裏も白いです。

そして釉薬付けです。釉薬の種類も沢山ある上に、土によつて本焼きした時の色が変わるので、思った通りの色が出る事もあるれば、「あれ?」「おやっ!」と予想外の色が出る事もあるそうで、悩んだり、相談したり、色見本を参考にしたりして釉薬を決めるそうです。

素焼き
〜
釉薬



初作品



付け方も釉薬にドボンと付け入れる、柄杓で掛ける、吹き付ける、陶芸用の絵の具で色を付ける等あります。私は初心者なのでシンプルな付け入れるやり方を選びました。時間をかけずにパパッと行わなければならぬのですが、ついつい入れすぎてしまいました。あたふたしていたので親指の跡が…。皆さんは半分色を変えたり、垂らしたり、ふちの色を変えたり、絵を描いたり、様々な付け方をしていました。

そしていよいよ、本焼きです。素焼きと同じ過程（焼き温度は高く変わります）を経て窯出しになります。カラフルな色の陶器が現れて「うわ〜！」となります。ふちがちよつと凸凹していましたが、初作品は自己満足で「なかなかいいじゃん」でした。最後に裏を紙やすりでこすって完成です。練りから本焼きまで時間がかかりますが、作業過程中は心が落ち着く時間が流れている感じがしました。

毎週木曜日の午前と夜の2コースがあります。詳しくは公民館まで。作陶クラブの皆さんありがとうございます。





鎌倉のぶ子さん（美会）

私は、小川で生まれ、小川で育ち、小川で暮らして84年の月日が過ぎました。

私の小学校の頃は小学校のことを「国民学校」と言い、当時は1学年120人ほどの児童がいました。洋服もない時代だったので、着物にモンペをはいて、そして母が作ってくれたカバンを肩にかけ、わら草履を履いて通っていました。当時は校門を入ると校庭の東側に



「いらっしゃいませ」主人と店番です

「奉安殿」という立派な建物があり金色と黒で輝いており、中には天皇様の御勅語が入っていると知られており、そこで最敬礼をしてから教室に入ったものでした。当時は戦時中だったので、勉強より防空演習のほうが多く毎日今の小学校の裏山ランドの下にある沢に逃げ込む訓練をしていました。6年生が先頭で私たち1年生、2年生と続きました。そして終戦を迎えることになりましたが、終戦日の翌日、学校に行く毎朝最敬礼をしてあれ程大切なものと言われた「奉安殿」がめちゃくちゃに壊されており、びっくりしたのと同時に戦争が終わったということを実感した出来事でした。

その後、定時制高校を卒業すると、家で農業に取り組みました。当時は、農業最盛期で養蚕に酪農、ホップにタバコとあらゆる換金作物を村中の人を取り入れていました。

そして、縁あって主人と結婚しまし



城あともぐりは楽しい。でも熊の出没がこわかったです



踏みしめて楽しむ
ミシンをより
楽しみます
何を

た。結婚した当初主人は農業収入だけでは大変と長野市の家具問屋に勤めていましたが、小川で店をやりたいと昭和44年に大久保に「みずず家具」

店を閉じてからは二人で村内の史跡巡りをしました。私は、公民館報の編集委員として村内の史跡を紹介していたので興味があり古山城、立屋城、馬曲城など十か所の城跡を歩きました。また県内の三重の塔巡りもしました。

を開きました。「店を開いたら一番に行くよ」と言ってくれぬMさんは約束どおり一番に来てくださいました。慣れない商売でしたが、多くの方に助けてもらい、励まされ、慰められ言葉では言い表せないほど嬉しかったです。また、夫婦で買い物に来て、支払いをする際、お店を始めた頃は男性が支払いをする方が多かったのですが、だんだんと女性が多くなって女性の社会進出を感じました。人とのつながりに温かさを感じていた商売でしたが、主人の体調が悪くなり、約半世紀続けた店を閉じることにしました。



昔は虫よけと云えば除虫菊だけだったんだって

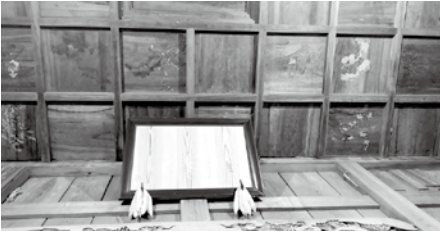
そして今は、近くに住んでいる孫たちと語り合い、「読書云」の仲間と古文をこぶん楽しみ、2軒分の家庭菜園を頑張っています。「アブラ虫退治にはマリーゴールドを植えると良いよ」と隣の畑の方から教わりました。多くの人に支えられて小川村に生まれた幸せをかみしめています。そして、今後若い人が増え、以前のような活気溢れる小川村になればと願っています。



『枕草子』
楽しいね
むずかしいけど

味大豆十二神社

NHK大河ドラマ
で「鎌倉殿の十三人」
が放映されているな
かで、鎌倉幕府の初
代侍所別当を任され



天井画



石祠

ている人物「和田義盛」がいます。
源頼朝に侍従し木曾義仲と平氏征
討の軍功を収め、後の鎌倉執権職
の北条氏と争いで建保元年（西暦
1213年）「和田合戦」で一族
が滅ぼされた時代背景から話が始
まります。

和田一族の生き残りが、和田義
盛の三男「和田義秀」が、安房

の国（現在の千葉県）または王
滝村の三浦（みうれ）に逃れた
伝説があるが、本当の真意は分
かりませんが、味大豆の十二神
社は和田義秀が氏神様として石
祠を祀ったのが始まりだそうで
す。この石祠には「貞応2年（西
暦1223年）」と刻んである
が、来年で800年を迎えます。

和田義秀がこの地に流浪落着し
た痕跡は分かりませんが、歴史
上では弓の名手とあり調べてみると、地名に「矢下」
「的屋敷」とあり、何か騎馬射の習練場所のなごりか
と思われる。

味大豆周辺は、近年まで地滑りが多く宮殿を造営し
ても何度も災害に見舞われてきました。現在のお宮は、
明治27年に再建し、梁の彫物、拝殿の天井画が見事に
施されています。平成17年度には村の文化財に指定さ
れました。



彫刻

社



十二神社は、全国の分布範囲を調べてみますと、長野県の北信と新潟県に多く崇拝されているとのこと。十二神社の祭神は、干支の十二支と思われるが、古事記による日本神話では高天原から次々と誕生した十七柱（内、十柱の神々は五組の夫婦神）の神々の総称で、その内の一柱を国土が恒久に続くことを願って祀っているとのこと。

この十二神社には、もう一体の祭神が合祀られています。合祀の前は、四国の金毘羅様を味大豆集落の南側の山に祀ったが、あるとき火柱が立ち、易で調べたところ、集落の南側より北側に居座りたいとのこと。合祀されたと古老の言い伝えがあります。

昭和30年代には40戸以上の氏子が、現在では、24戸ほどに減ってしまいました。何より男性が少ないなか、

逆に女性の長生きの方が多く、月初めのお宮参りは、シニアカーで参拝することが何よりも楽しみの一つとなっています。祭日は、1月元日の初参拝と稲丘神社の秋祭りに併せ祭典を行っています。



秋祭り



獅子舞

コロナの影響で2年間ほど神楽の奉納ができませんが、今年がありました。今年秋祭りにはコロナ感染対策の3密を避けながら奉納することができました。

「鎌倉時代」

現在、地上波で放映中のNHK大河ドラマ「鎌倉殿の13人」に関連して、村内に残る場所を調べてみました。

☆地名（口頭及び伝承から）

○かくれまや

昔、木曾義仲が戦死した後、源頼朝は木曾の残党を厳しく追跡しました。木曾義仲に従っていた仁科城主（現大町市）仁科盛遠（にしなもりとう）は、義仲の第二子力寿丸（りきじゅまる）を逃すため、桐山から持京へ至る道は険しい峰道があります。その峰を登ったあたりにちよつとした草地があります。一団の武士たちがその地に小屋を建てて潜むように住んでいた伝承があります。



高山寺

村人たちは不審がって、そつと様子をつかがった。

「侍たちがざつと二十人、馬は七頭じゃ。」

「幼い子がおるぞ。きりりと鉢巻をして、鎧を着けた侍たちに囲まれて」

村は突然と現れた武士団にとまどった。そのうちに、鎌倉勢に破れた木曾義仲の残党がこの山中に逃れて来たらしいという情報もたらされた。あの幼い子は義仲の若君で力寿丸といい、頼朝から命を狙われているということも。

そんな噂が村中に広がったある朝

「おい、みんな、侍たちが消えちまったぞ」

若者が叫びながら山から駆けおりて来た。村の者はぞろぞろと峰の草地へやって来た。不思議なことに小屋はきれいに取り払われ、一人の武士もいなかった。ただ、馬の糞だけがあちこちに残っていた。いったいどこへ逃れたのだらうか。村の人たちは、昨日までの鎧や兜や太刀のきらびやかさを思い、夢のように思えてならなかった。「追手は木曾の若様の行方を探しにやってくるだらう。わしらは、なんにも知らんことにしよう。」

人々はそう約束し、小屋のあった場所をひそかに「か

くれまや」(隠れ馬屋)と名付け、あの幻みtainな情景をいつまでも忘れないように話し合った。

(『信州の民話伝説集成(北信編)』より)

※追手から逃れるため、しばらくこの地に隠れたのち、裾花川上流の洞窟「木曾殿アブキ」に逃れたものと思われま。

○鷹打場(たかうちば)

かくれまやと同じく桐山から持京へ至る険しい峠道で遠くの山が一望に眺望できる場所があります。

「武士の二隊がきて休息していると、何処からともなく大きな鷹が飛来して武士たちの頭上で旋回した。武士たちは得意の弓でこれを射落とし、その後も鷹狩りが行われたことにより「鷹打場」と呼ばれるようになった」と伝えられています。(『桐山の民俗』誌より)

○浪人沢(ろうにんざわ)

桐山李平裏山の谷沿いで「仁科領から武士の一隊がこの谷に入って狩をしたり剣術に励んでいた」と伝えられています。(『木曾力寿丸の伝説地名』より)

○次木(なむぎ)

日本記地区に次木集落があります。普通に読むと「つぎぎ」と読んでしまいます。読み方はアイヌ語から来たのではないかと伝えられています。木曾義仲の落人が、大洞峠の裏、鬼無里側辺りに隠れ住み、その場所が地滑りにより、現在の場所に移り住んだと伝えられています。

○花尾和田(はなおわだ)・夏和和田(なつわだ)

前項の神社紹介した和田一族が、味大豆に定住するまえに、花尾和田あたりにいたと思われる。薬師上流の味大豆と薬師下流の夏和和田に分かれて住んだことで地名に和田が付いたかと推測されます。

☆仏閣

○高山寺 観音堂・三重塔

観音堂が堂平(現在の道平)「堂屋敷」にあったものを地滑りのため、建久6年(西暦1195年)源頼朝が、現在の場所に移築再建とあわせ、三重塔を創建されたと伝えられています。

☆落武士

○和田

建保元年(西暦1213年)「和田合戦」で一族が滅ぼされ、和田義盛の三男「和田義秀」が逃れてきたのではないかと伝えられています。(詳細は前項の神社紹介で)

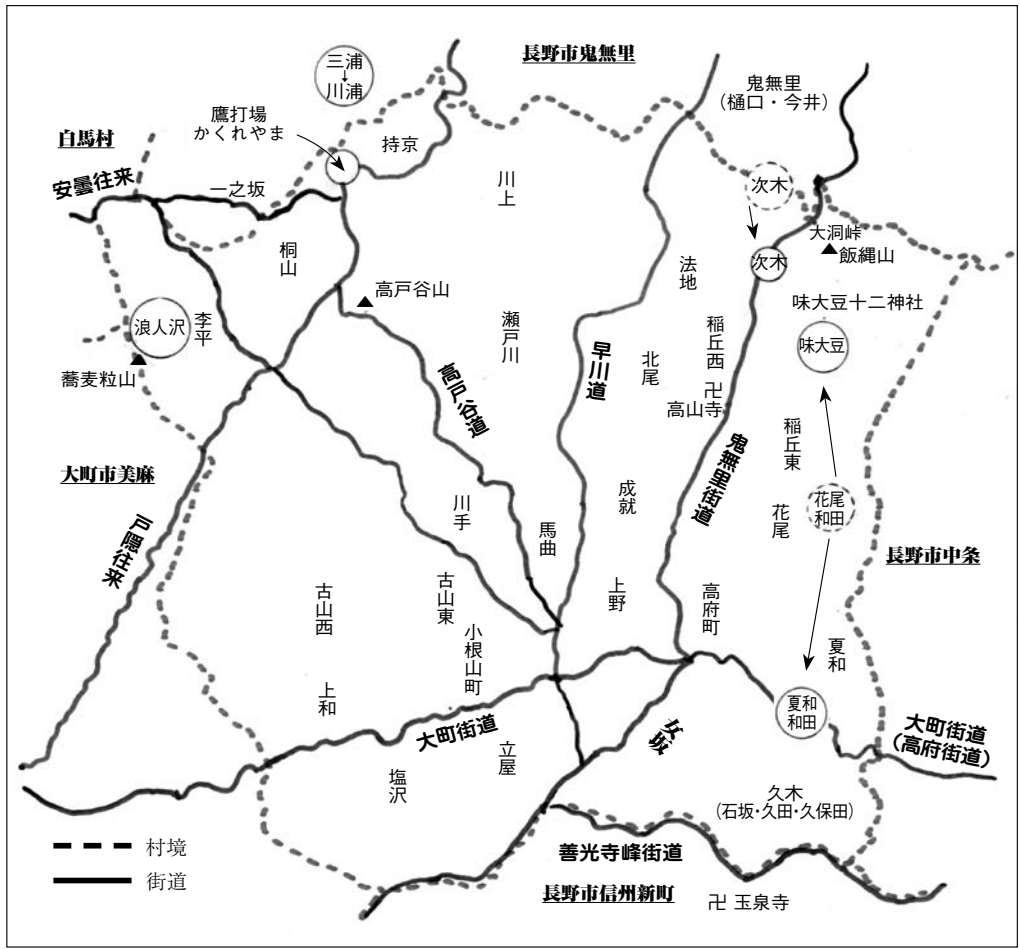
○川浦

隣村の鬼無里地区では、相模国鎌倉から三浦氏が移住してきました。鎌倉勢の追手から逃れるため、三浦の「三」を縦の「川」にしたことから、川浦と名乗り始めたと伝えられています。

☆木曾義仲の家臣が、逃亡潜

伏した地域

○善光寺峯街道沿には、木曾義





高山寺三重塔

仲に従事した多く家臣が残っています。なかには、木曾義仲を弔う玉泉寺があります。

久木地区 石坂、久田、久保田

信州新町地区 竹村

『心の故郷〜水内郷久木村〜』
より)

○鬼無里地区には、木曾義仲の旗下で勇名の高かった樋口、今井の氏姓があります。

《小川短歌会作品》

○北信随一と言う御柱祭御射山祭奉燈短歌と共に輝く

松本 智

○久しぶりお月様出て手を合わすこの苦しみよ去れと祈るも

松本富貴枝

○何もかもデジタル化したこの社会慣れたつもりも時に戸惑う

西沢 哲朗

○朝取りの瓜、茄子、トマト食卓に不出来なれども味は抜群

染野喜久子

○夏草の中に鳴きおる虫の声キリギリス衰えコオロギ盛る

西條 定子

○養蚕は時勢に合わず廃されて枝垂れし桑は庭に古りたり

伊藤 宗善

秋のミニイベント



図書室だより

小さな木の空

第110号
図書委員会

お月さま特設コーナーをつくりました

9月10日から30日まで、図書室にて中秋の名月にちなんで「月の本コーナー」をつくりました。新型コロナウイルスの感染レベルが高く、急遽イベントの内容を変更して開催。お月見や月をテーマにした絵本、児童書、図鑑などの蔵書に新着本も加え、月の本がずらりと並びました。本を集めるだけのささやかなイベントではありませんでしたが、本を眺めているとじわじわと月に興味が湧いてきたり、「こんな本があったんだ」と新たな発見があったり。利用者の方が本を借りている姿も見られ、やってよかったなあと思います。図書室入り口には、本物のススキとお団子も飾って雰囲気を楽しみました。足を運んでくださった皆様ありがとうございました。



ススキとお団子



月の本コーナー

ブックスタート

『子どもに読んで聞かせたい本は?』

～生後6ヶ月の赤ちゃんへ本のプレゼント～

令和3年11月から令和4年2月生まれの赤ちゃん

『おのゝみ』
酒井 駒子



伊部 永蘭くん

『しろくまのパンツ』
ツバラツベラ



守屋 朔くん

デジとしょ信州 ■ を使ってみた！

2022年8月5日から電子書籍サービスが開始した、長野県内の77市町村と県による協働の電子図書館「デジとしょ信州」をご存じですか？



QRコード

約1万8千点（22年10月現在）のデジタル書籍を1週間借りることが出来るシステムです。長野県民は無料で利用可能。小川村公民館で気軽に申込み、あっという間に16桁のID番号と仮パスワードを受け取れます。あとは、簡単操作で本を借りるだけです。

キッズ&ティーンズも充実しています。「これもマンガ？」のマンガ特集も気になります。デジとしょ信州の蔵書ならではの新たなマンガの魅力を発見できそうです。

おうち時間が充実するデジとしょを活用してくださいね。

【聞いてみました！ユーザーの声】

“操作は簡単で、本を借りるのも簡単なので気軽に使えます。”

“返却もすぐ出来るし、7日後に自動的に返却されるので返し忘れる事はありません。”

“レシピ本とかも充実しているので、気軽に新しい料理に挑戦できます。”

“Wi-Fi環境が完備している場所では、通信速度が速くデジタル書籍が快適に読めます。”



図書室のパソコンで閲覧

図書室の楽しみ方～基本編

「図書室以外でも本の返却ができる！」

図書室で借りた本を図書室以外でも返却できるのをご存知でしょうか？びっくらんど小川、にこにこ保育園に返却ポストが設置されておりますので、どしどしご活用ください。



▲びっくらんど小川の返却ポスト

【図書室 利用案内】

開館時間：9：00～17：00

休館日：月曜日（祝日の場合は火曜）

貸し出し期間：2週間

貸し出し冊数：5冊

次回イベントのお知らせ

「大きな望遠鏡で冬の夜空を見上げてみよう。何がみえるかな？」

冬の夜空は、火星や木星だけでなく、華やかなオリオン座とそのまわりの星雲たちを見ることができます。小川村天文台の移動式望遠鏡をお借りして、皆で星空観察を企画中です。月の模様もみえるかも。詳しくは後日発行するチラシ・ポスターをご覧ください。お楽しみに！

ハッピー なやと



元気に大きくなれ

篠原慶太郎さん（小川村駐在所）

私達が小川村に移住？してきて1年目。

昨年の6月頃に受かる気がしなかった昇任試験に奇跡的に合格し、泣く泣く白バイ隊員を引退し、どこに配属になるかとドキドキ・ワクワクしていたところ、小川村

駐在所に配属となりました。



私は道を覚えるのが苦手で、赴任当初は、自然豊かな小川村に手厳しい洗礼を受け、山間部の地域をパトロールする度に道に迷い、「私はどこにいるのでしょうか？」状態になり、110番通報して山岳救助隊を要請しよ

うかと思っただけです。

小川村に越してきたばかりは、小川村での子育てがとも不安でしたが、すぐに長男の颯仁（はやと）は小川村での生活に慣れ、村の育児支援で颯仁を小川村保育園に未満児として一時的に受け入れて頂き、毎日楽しそうにしていました。（来年から年少さんとして、お世話になります。）保育園で覚えてきたことを家で披露してくれたり、苦手なお昼寝も上達したり、お友達の名前を覚えたりと日々の成長を感じることができました。

そんな折り、令和4年8月1日午後12時45分に大きな産声を上げ颯汰（そうた）が誕生しました。

颯汰の出産までは、あつという間でしたが、前回の妊娠中は、検査結果が良くないことがあり、ハラハラした思い出がありましたので、颯汰を妊娠中も気が抜けませんでした。

そんな親の心配はよそに颯汰は元気に大きな産声を上げて生まれてきてくれました。子供が生まれてきた時の感動は、うま



く表現できませんが、この世で一番幸せな出来事のように感じました。妻と颯汰が退院当日に颯仁が病院で初めて赤ちゃんに
対面した時は、満面の笑みで「あらー、あらら、赤ちゃん」と言つてとてもうれしそうにしていました。

私達のような小さな子供を子育てするご家庭では、周り
りご近所に迷惑が掛からないかなどや行政のサポート体制は整っているのかなどが不安材料になります。小川村ではご近所の皆様のご理解もあり、のびのびと子育て
ができています。

少し余談ですが、昨今の子育てをする親と子供達を取り
巻く環境は、非常に肩身が狭いと感じる世の中になりつつあり、残念ながら都市部や市街地では、「隣の家の

赤ちゃんの泣き声がうるさい」「子供達が公園で遊んでい
てうるさい、黙らせる」等の110番通報が度々寄せら
れているのが現状です。

そのような世の中であるにも関わらず小川村では子供
達を村の宝物のように大事にしてくれて暖かみを感じま
した。

小川村は地域一帯となつて子育て支援や子育てに理解
をしてくれる数少ない自治体だと思えます。

ご近所の皆様へ

私と颯仁が毎日のように「ぎゃー、ぎゃー」と騒いで



いるのに嫌な顔を
せず、可愛がつて
くれてありがとう
うございます。お
陰様で元気に(元
気過ぎて困ってい
ます)、すくすく
と成長しており
ます。

路端の隅でたずんでいる動植物や石造物について紹介します。このコーナーに情報を提供されたい方は公民館までご連絡ください。

シリーズ 路端の小さな命 ②

道祖神に願う

☆道端で見かけませんか

道沿いを歩いていると、集落の外れで石造物の一群を見

かけます。そのなかで「道祖神」の文字で彫ったのを目にしますが、普段何気なく気に留めることがありません。「いつ・どんな思いで設置したのか?」当時の願いを探ってみました。



☆道祖神のいわれ?

道祖神の歴史は古く、今から1200年前の平安時代にまで遡ります。道祖神は、元来、外からくる邪悪なもの、疫病、悪霊を村境で「さえぎり」村を守ってくれる神様です。地域によって様々な呼び方があり、道陸神(どろくじん)、サエ(サイ)ノカミなどと呼ばれています。また、「サイ」は幸として、男女円満・縁結びの神・旅人の安全を守る神としても信仰されています。

小川村の石造物の資料によると、道祖神は様々な形状をしており、村内に点在する道祖神は全部で69体。多くは繭玉石や丸い玉石で、当時の人たちは、自然造形である石にも霊異があるとして信仰の対象としていたようです。その他に、安曇野地方に多い双代像(男女の像)は4体、「道祖神」が刻まれた自然石文字碑は20体ほどあるとのこと。

☆疫病退散とともに

集落の外れにある道祖神は、村の守り神でした。今でこそ医療が発達し、病院に行けばすぐに治療してもらえますが、当時は病気の原因が分からないことも多く、道祖神は「疫病から村を守る神様」として、当時の人々の心より所だったに違いありません。

小正月の1月14・15日に行われる道祖神の祭り「ドンド焼き」とともに、コロナが終息し無病息災で過ごせることを願います。

